



「あなただけの
ねこバナ。」



其一

「言い残す事は無いか」

白帷子を身に纏った八日市藩藩士成田与右衛門に向かって、奉行が訊ねた。
首斬り役人の長内半兵衛は、与右衛門の右斜め後ろに立ち、静かに彼を見下ろしている。

「は。では...辞世の句を」

表裏 浮世の移り変わる様
猫の瞳も かなはじと見ゆ

品に欠けるが率直な句だ、と半兵衛は胸の内で呟いた。
それにしても猫とは、この御仁、猫がお好きのようだ。

「では、よいかな」

「は」

与右衛門は、奉行に一礼した。そして、半兵衛にちらと顔を向けた。

「では、お願い申す」

「うむ」

与右衛門は顔に白布を掛けられ、両脇を役人がむんずと掴み、押し下げられる。
奉行の手が、さっと上がる。

「御免」

ひゅん、と刃が鳴った。
与右衛門の首は、ゆっくりと地に墜ちた。

* * * * *

半兵衛は仕事を終え、ぶらぶらと家路についた。
ふと今日の罪人の事が頭に浮かぶ。

八日市藩藩士成田与右衛門は、境川藩の江戸屋敷に侵入、金品を強奪した由にて、打首となった。何故、実直であった彼がそのような大罪を犯したのか。彼を知る者は皆訝り、怪しんだ。

壮年の彼には、妻と年頃の二人の娘があったそう。家族は江戸処となる。
何時にも増して、後味の悪い仕事だ。半兵衛は唾を路傍の叢に吐いた。

斬首を任せられて早十年。半兵衛は山田浅右衛門一門でも生え抜きの、腕利き首斬り役人である。
師匠が役目を果たせぬ時、真っ先に声が掛かるのは半兵衛で、一刀両断の許に首を落とすその太刀筋は、罪人に痛みすら感じさせぬ腕前と評され、師匠をも凌ぐと云われる。

性格は朴訥で無口。妻はあるが子は無い。血腥い稼業とは裏腹に、静かで安らかな生活を送っていた。

「おかえりなさいませ」

半兵衛の帰宅を、妻の千代と下男の源助、そして二匹の猫が出迎えた。

「うん。直ぐに風呂に入るぞ」

「それが、お前さま、露庵先生がお見えです」

「何、露庵が。いや、今日は仕事があったので。身を浄めてから会うと申して、しばしお待ちいただくように」

「はい」

「では旦那様、ご用意はしてありますので、どうぞ」

千代は奥の座敷へ、半兵衛と源助は風呂場へと向かった。

* * * * *

半時後。

「待たせたな」

半兵衛は緋の浴衣に着替えて現れた。

待っていた客人は、井上露庵という町医者で、長崎と京で修業を重ねた腕利きだ。

腑分けの立会いで知り合い、以来親しく杯を交わす仲になっている。

「おう、突然にすまぬな。今日は少し訊きたい事があってのう」

露庵は半兵衛とは好対照で、気さくで話し好きだ。何かと理由をつけては、半兵衛宅に上がり込んで話を聞かせる。無口な半兵衛も、彼の話が面白いと見えて、寧ろ喜んで聴き入っている様だ。

「俺にお主の役に立ちそうな話が出来るとも思えんが」

「そうではないのだ。お前だから聞ける話だ」

「ほう」

半兵衛は千代が運んできた茶を啜った。

「何だその、俺にしか出来ぬ話とは」

「十日ほど前、屍体のまま鈴ヶ森で磔になった罪人があったろう」

「ああ、日本橋で無差別に通行人を斬りつけたという、あれか」

「そうだ。あの罪人は、獄中で死んだと聞くが、どんな死に方だった」

「うむ。俺は直に見ていないが…。牢番の話では、えらく喚き立てて暴れまくった後、いきなり倒れ込んでしまったそうだ」

「それで、もう死んでいたと」

「そうだな」

「検死をした医者は何と」

「玄信殿は何も。気が触れたのだろうとしか言わなかったな」

「全くあの藪医者め」

露庵は口惜しそうに言葉を吐いた。

「私が考えるに、あれは狂うた犬の病だ」

「犬の？」

「そうだ。ここ暫くは江戸では聞かぬかも知れぬが、最近また流行り始めている。上方では死者が多く出ているらしい。あの御殿医気取りの役立たずが、『狂犬咬傷治方』すら読んでいないと見える」

「余程玄信殿が気に食わぬようだな」

「当たり前だ。金儲けしか考えぬ不屈き者よ」

「まあその辺にしておけ。それでその病とは、どんな病なのだ」

「まだよく判ってはおらぬが、動物同士の咬み傷から伝染る病らしい。咬まれて暫く経つと病が重くなり、錯乱を起こし狂乱状態になって死に至る。私が知る限り、助かった者はいない」

「怖ろしいな」

「そうだろ。その罪人、夜鷹蕎麦屋の亭主だったようだが、夜中に店を出している際、犬に襲われたのだそうだ。それが三月前の事だ」

「三月も経ってから病が起こるのか」

「いや、もっと長くかかる場合もあるから、用心せねばならぬ。それにな、その病、犬だけではない。馬にも牛にも、猫にも罹る」

「そうなのか」

半兵衛は猫好きで、よく餌をやって養うために、小さな家には何匹もの猫が立ち寄る。近所の口さがない者たちは、「猫屋敷」と揶揄する程だ。

「そうだ。お前は猫が好きだろう。用心に越した事は無い」

「ふむ。その病に罹ると、猫はどうなる」

「そうだなあ。私は猫は見た事が無いが...。恐らく、変な鳴き声を発し、光を恐れるようになる。水を欲しがすが、飲もうとすると苦しがつてのたうつ。口は半開きになり、涎を垂らす。そして凶暴になる。まあこれは、犬や人の場合を基にした私の推測だな」

「なるほど...。心して置く事にしよう」

「そうしてくれ。それからな、お主の師匠が持っている本の事だが...」

と、露庵が話題を切り替えたところで、

「失礼いたします。あの、お前さま」

千代が障子の向こうから声を掛けた。

「何だ」

「お客がございました」

「何方だ」

「それが...あのう」

「いいから言うてみい」

「...成田与右衛門様の奥方様と、御嬢様が、お二人でお見えです」

半兵衛は眉を大きく動かした。

「ほほう、お前も隅に置けんのう」

「戯けた事をぬかすな」

浮いた話など微塵もない事を承知でからかう露庵を、半兵衛は本気で嗜めた。

「どれ、私は席を外す事にしよう。また明日にでも寄らせて貰う」

「そうか、すまぬな」

「じゃあな」

立ち去る露庵を見送ってから、半兵衛は千代に言った。

「こちらにお通しなさい、失礼のないように」

* * * * *

「成田与右衛門の妻、芙佐と申します。これなるは次女の咲」

そう言って、次の間に控えた壮年の女は深々と頭を下げた。

「長内半兵衛でござる。さあ、こちらへ」

半兵衛は上座を勧めた。半兵衛は浪人、成田与右衛門は罪人といえど藩士である。

「いいえ、こちらで」

芙佐は頭を下げたまま動かない。半兵衛は観念して、上座を右手に見たまま腰を据えた。

「それで、どのような御用向きですか」

ゆっくりと芙佐は頭を上げた。後ろの娘はまだ伏せたままである。

その脇には、木で出来た檻があり、中には黒い猫が座っている。

「このたびの御仕置、長内様には主人に御情を頂戴いたしました。謹んで御礼を申し上げます」

また芙佐は頭を下げた。

「情けなど掛けた積もりは毛頭ございません。私の役目を果たしたまでです」

「いえ、一刀両断の素晴らしい太刀捌き。お噂通り、主人は痛みも感じる事無く、三途の川を渡りました事でしょう」

「はあ、それは...」

打ち首になった者の感覚など、判ろう筈も無い。いや、この者達がそう思うことで、気が楽になるのであれば、それも良しとするか。

「そうであれば良いのですが」

半兵衛は軽く頭を下げた。

「その御情に、もう少しばかり、縋らせていただきとう存じます」

「は」

後ろに控えていた娘が、ずい、と木の檻を前に押し遣った。

「これなるは、主人と、長女の松が大事にしていた猫でございます。私共は江戸から去らねばなりませぬ故、何方かお世話をして

くださる方を探しておりました処、長内様が猫好きと聞きましたものですから、ご無礼を承知で、連れて参った由にございます」
「そうですか」

檻の中の黒猫は、じっと半兵衛を見た。しかし眼には生気が感じられない。病ではないか、と半兵衛は思った。
ならば、余生をこの屋敷で送らせても良からう。何匹もの猫の最期を看取ってきた半兵衛には、この猫が愛おしく思えた。

「承知しました。当方でお預かり致しましょう」
「有難う存じます。これで我等、心残り無く国に帰る事が出来ます」

深々と頭を下げた芙佐と咲。半兵衛はふと気が付いて、訊ねた。

「そう言えば、上の御嬢様はどうなされた」

芙佐の顔が凍り付いた。

「亡くなりました」
「亡くなられた」
「はい。主人がお縄を頂戴して直ぐに」
「そうでしたか…。それはお気の毒に」
「いいえ、これも運命でございます」

精一杯の作り笑いと見える表情を、芙佐は顔に貼り付かせた。

「重ね重ねの御厚情、有難う存じます。では、これにて」
「は。道中、どうぞお気を付けて」

半兵衛は深々と頭を下げた。
その頭を上げる一瞬。

伏せた芙佐と咲の眼に、揺らめく炎のようなものが見えた。

* * * * *

「矢張り、病なのでしょうかねえ」

千代は鯉節を飯に混ぜ込んで、檻の中の黒猫に与えた。
しかし猫は、顔を背けて食べようとしない。
すっかり夜が更けてしまったというのに、猫は何も食わず、何も飲もうとしない。

「可哀想に」

千代は心配そうに、猫を覗き込んだ。

「そんな檻に入れられているから、気が塞いでいるのであろう。どれ、縁側にでも出してやろう」
「駄目ですよ。もう随分肌寒いのですから、病だったら身体に障ります」
「ほんの少しの間だけだ。案ずるな」

半兵衛は檻を抱えると、縁側へと運ぼうとした。しかしどうも変だ。家の中に居る猫達が、この黒猫には寄り付こうとしない。

何時も新入りには興味津々な猫達が。

半兵衛は、薄ら寒いものを感じてはいた。しかし。

この猫がもし化け猫か何かであっても、精一杯世話をしてやろう。そう半兵衛は決めていたのだ。

半兵衛は縁側に檻を出した。

満月が、こうこうと辺りを照らしている。

「今日は明るいおう」

半兵衛は月を眺めて、ふう、と息をついた。

「ぎゃうううううううううう」

途端に、檻の中の猫が騒ぎ出した。

檻をばりばりと引っ掻き、外に出ようと暴れている。

「あらまあ、どうしたのでしょうか」

「なな、何でやすかい」

「千代、源助、近付くな」

半兵衛は千代を手で制し、ゆっくりと檻を外に向けた。

そして、檻の口を勢いよく、ばん！ と開けた。

「ぎゃうッ」

黒猫は庭に飛び出した。

「ぎゃおううううううう」

月に向かって、怖ろしい声を放っている。

見ると、左の後ろ足が無い。

と、そこに、物置の隅で生まれた仔猫が、ひよこひよここと現れた。

きよとんとして、凄まじい形相の黒猫を見ている。

黒猫はそれに気付き、

「じゃるうううううう」

威嚇し、身構えた。

「危ない」

半兵衛は庭へ駆け下りた。

「ぎゃおっ」

黒猫は仔猫に飛びかかったが、間一髪。

噛み付いたのは、半兵衛の右手だった。

仔猫は驚いて、一目散に逃げ出した。

「ぎうううう」

渾身の力で黒猫は半兵衛の右手を咬む。

びき、びきと鈍い音がした。

「おのれッ」

半兵衛は黒猫を振り払うと、居合抜きで、黒猫を薙ぎ斬ろうと構えた。

「ふしゃあああああああ」

黒猫は、ぶるぶると震えながら、よたよたと蹠跟けながら、全身の毛を逆立てている。

牙を剥いたその口からは、涎が滴っている。

「ぶしゃあああああああ」

「こ、これは」

半兵衛はその猫の様子に、ある異変を感じ取った。

露庵の言葉が頭を過ぎる。

「あれは狂うた犬の病だ」

芙佐と咲の、揺らめく炎のような眼が蘇る。

柄に掛かった右手を戻し、猫の首根をむんずと抑える。

猫は狂ったように暴れ出し、半兵衛の右腕を搔き、蹴った。

皮が剥け、血が飛び散る。

「おお、お前さま」

千代は蒼白になって叫んだ。半兵衛は源助を見遣ってこう言った。

「源助！ 籠を持って」

「か、籠でですか。どどどどんな」

「何でもよい。この猫が入ればな。早う！」

「へえッ」

源助は忽ち、釣りに使う大きな魚籠を持って来た。

半兵衛は渾身の力で、猫を魚籠の中に押し込む。そして手拭いで魚籠の口を塞ぎ、魚籠を吊り下げる縄で手拭いごと口をふん縛る。

猫は魚籠の中で怖ろしいほどに暴れている。半兵衛は揺れ動く魚籠を源助に渡して言った。

「この魚籠に盥を伏せて乗せ、味噌樽でも乗せておけ。魚籠が破れるかもしれん」

「はあ、あの、しかし...」

「こ奴には生きて貰わねばならん、それからな、山田先生の道場へ走って、虎之助を急ぎ呼んで参れ」

「へッ」

「急ぐのだ。早う行け！」

「へ、へええッ」

源助は魚籠を抱え、転がるようにして走り去った。

半兵衛は改めて自らの右手と右腕を見遣る。月明かりにも咬み傷と搔き傷が痛々しい。

「千代、襷を持って」

「は、はい」

呆然としていた千代は、弾かれたように襷を取って戻った。

「俺の腕を縛るぞ。手を貸せ」

「はい」

千代が襷の片方を手に巻き付け、握り締める。半兵衛は右の二の腕に襷を二回り程巻き付け、力を込めてぎりぎり締め付けた。

「お前さま、これは」

「毒が入らぬようにな。こうせねば、俺は死んでしまう」

「えッ」

「露庵の奴に聞いた、狂うた犬の病だ。猫にも罹るらしい。あの猫は、その病に冒されていたようだな」

むん、と半兵衛が縛り上げ、千代が結び目を作る。半兵衛はどたりと縁側に座り込んだ。

「では、あの猫をお持ちになった、あの奥方は」

「そうだ。猫が病に冒されているのを知っていたのであろう。俺を殺すのが目的だったのかも知れん」

「そんな！ お前さまがあの方のご主人をお斬りになったのは、御役目でございます。筋違いです」

「そうだとは思うがな。他に恨みの晴らしようが無かったのだろう。しかし」

半兵衛は考え込んだ。

「この一件、どうやら裏がありそうだ」

* * * * *

半時も経たぬ内に、源助が虎之助を連れて現れた。

「おう、早かったな」

「師範、何事ですか」

「お主にいい話がある。仕置場の役目、お主に譲るぞ」

「は？」

「俺は、手が使えなくなりそうだ」

半兵衛は自らの右腕を差し出して、言った。

「試し斬りには丁度良からう。ぱっさりやってくれ」

「な、何を言い出すんですか」

虎之助の引きつった顔に向かって、半兵衛は笑みを浮かべた。

「大丈夫だ。俺が見込んだお主の腕なら、さほど痛みは有るまい」

「しかし」

「お前が斬るのを躊躇ったら、俺は死ぬかもしれん」

「何ですって」

虎之助は千代の顔を伺った。千代は黙って頷いた。

「俺の刀を使え。毒が回らぬ内に、さあ」

「はい...では」

虎之助が、源助の差し出す刀を取り、抜く。

蒼白い刃に月光がざらり、と光る。

「御免！」

鋭い声と共に、刀が振り下ろされた。

半兵衛の右腕は、ごとりと縁側に転がった。

其二

「全く、無茶な事を」

露庵は半兵衛の手当をしながら、毒づいた。

虎之助に右腕を切断して貰って直ぐに、半兵衛は露庵の許を訪れて、治療を依頼したのだ。

「そのまま俺の処に来れば良かったのだ。華岡先生の通仙散を試してやったものを」

「お主の様な医術狂いにあれこれ試されるのは御免だ」

半兵衛は表情ひとつ変えずにそう言いながら、露庵の手当を見守った。

「まあ、虎之助殿の腕前が確かで良かった。ほれ、これで終いだ」

露庵が包帯を結び終わると、半兵衛はじっとその結び目を見つめた。

肘の少し上から先が無くなり、肩から棒のような二の腕が伸びているだけである。

「さあ、薬を飲んで、少し横になって休め。熱が出るかも知れん」

「ああ、そうする」

半兵衛は、言われた通りに粉薬を飲み、露庵が用意した床に横になった。

矢張り熱が出て来た様だ。痛みに熱と眠気が勝ったと見え、半兵衛は程無く、眠りに落ちた。

* * * * *

「旦那様あ」

日が随分高くなった翌日の午前。

半兵衛が露庵と共に粥を啜っている処へ、源助が駆け込んで来た。

「おう、どうであった」

「旦那様の仰る通りでござえました。成田与右衛門様の長女の松様は、四日前、原因不明の病でお亡くなりになっておられます」

「そうか。その症状については」

「へえ。お払い箱になった奉公人に、運良く話を聞くことが出来ました。なんでも、日の光を怖がったり、水を飲もうとして激しく咽せ込んだりしたそうで。最期には暴れて家中を駆け回り、奉公人達を襲おうとしたとか。悪霊に憑かれた様だったと、その男は言っておりやした」

「やはりな」

「ふむ」

半兵衛と露庵は顔を見合わせ、互いに頷いた。

「それで、与右衛門殿が境川藩の江戸屋敷に忍び込んだというのは、何が目的だったのだ」

「へえ。その奉公人の申しますには、松様の病を治す秘薬がその屋敷に有ると。それを盗み出すために、忍び込んだという話で」

「秘薬？」

「長崎伝来の何かとか…。それと、旦那様の仰るように、境川藩江戸屋敷と成田様の関係を詳しく探ってみたんでやすが…」

「何かあったのか」

「へえ…。境川藩の家老、只見玄蕃様が、与右衛門様の二人の娘、松様と咲様にえらくご執心だったとかで」

「ほう」

「お二人とも美人で評判でやすからね。何処で見初めたかは判りませんが、家臣やら下男やらを、成田様のお屋敷に日参させていたそうでございますよ。ところが只見様というのは、色狂いで評判の人物で」

「…」

「そんな処に娘達は遣れぬと突っぱねていたそうですが、流石にあちこちから圧力が掛かって、仕方なくお姉様の松様をその江戸屋敷へ、茶の湯の稽古と称して、向かわせる羽目になったのだそうです。それが一月前の話で」

「むう」

半兵衛は口をへの字に曲げた。元来この手の話は苦手らしい。

「案の定、松様は乱暴されそうになったので、逃げ出したのだそうでございますよ。ところが只見様は、家来に命じて、屋敷で飼っていた犬を放って、松様を襲わせたのだそうで」

「なに？」

「松様が自分のお屋敷に辿り着く間際で、犬が松様を咬んだのだそうです。傷は肩口だとその男は言っておりやした。そしてその時」

「ふむ」

「松様が大事に飼っていた黒猫が、松様を助けようと、飛び出したのだそうでございますよ。奉公人より早く、松様の悲鳴に気が付いて、犬の前足に咬みついたと」

「なんと」

「犬は松様から離れ、その猫の足を咬みちぎってしまったそうです。猫はそれでも、犬を威嚇して松様から遠ざけようとしていたのだとか」

「あの猫の後ろ足は、それで…」

半兵衛は少し考えた後、さらに源助に訊いた。

「松殿の傷は深かったのか」

「まあ出血は酷かったようですが、幸い急所を外れておりましたので、命に別状はなかったと。勿論ずっと伏せておいでだったようですがね。ただ、嘔まれてから十日ほどしてから、言動が怪しくなって来たと、そう申しておりました」

「それで、犬はどうしたのだ」

「十数人の浪人達が、タンポ槍でもって追い込んで、でかい鉄の檻に入れ、大八車で持って行ったそうでございますよ」

「その浪人達の素性は」

「さあ…それは判らないそうで」

「境川藩の江戸屋敷では、まだその犬を飼っているのか」

「それが、一月程前には、その江戸屋敷辺りで犬の酷く吠える声が聞こえていたのだそうですが、二十日ほど前には、ぱたりとその声がしなくなったのだそうです」

露庵は膝をぱん、と打った。

「やはり、その犬が病に冒されていたとみるべきだろうな。それを承知で、只見玄蕃とやらは松殿を犬に襲わせたのだ」

「惨いことを」

半兵衛は眉を顰めた。露庵は溜息をつき、続けた。

「そして、犬が病に罹っていた事、それが人に伝染れば命は助からぬ事も伝えたのであろう。その上で、病を治す秘薬が欲しければ、もう一人の娘を寄越せ、とでも言ったのであろうな」

「そ、その通りでございますよ。露庵先生、あっしがまだ言わねえのに、なんで判ったんでやすい」

「筋を辿っていけば、自ずとそうなるだろうよ」

「しかし酷い話でやすねえ。旦那様、評定所に訴え出る事は出来ねえんですかい」

「今となつては、物的証拠が無さ過ぎる。その犬も、恐らくもう死んでいるだろう。知らぬ存せぬで通されれば終いだ」

「はあ...」

半兵衛は、ふと何かを思い出した。

「源助、成田殿のお屋敷から、奥方と娘御はもう出立したのか」

「いえ、それがまだのようで」

「そうか...」

半兵衛はすっと立ち上がった。

憔悴した眼の奥に、光が宿った。

「おい半兵衛」

「俺の勘が正しければ...与右衛門殿の娘御が危ない。助けてやらねば」

「おい...」

右の二の腕を睨みつけ、半兵衛は呟いた。

「俺のこの腕は、高くつくぞ」

「あのう、旦那様」

「源助、耳を貸せ」

そうして半兵衛は、源助に何やら耳打ちした後、露庵が止めるのも聞かずに、施療院を後にした。

* * * * *

半兵衛と源助が、成田与右衛門の屋敷を訪れたのは、それから二時ばかり後の事だった。

源助は、背に大きな魚籠を背負っている。

門前には、与右衛門の次女、咲が、旅装束で佇んでいた。咲は半兵衛達の姿を認めると、狼狽の色を隠せなかった。

「もうお発ちですか」

半兵衛は優しく訊いた。咲は俯いたまま応えない。

「母上様は如何なされた」

「自害しました」

咲は搾り出すように言った。そして観念したように、半兵衛の顔を見据えた。

「母の埋葬も済みました故、これから国に帰ろうと思うた処でございます」

「そうですか」

「私をお斬りになりに来られたのでございましょう」

「いいえ」

「では何故」

「品川の宿までお送りしようと思うたのです。良からぬ事を企む輩がおりますでな」

「それならば構いませぬ」

咲は不敵な笑みを浮かべた。

「少々剣術には心得があります故。それに、むざむざあの輩の手に掛かる位なら」

「まあそう慌てなざるな」

半兵衛は咲の言葉を制し、強い口調で言った。

「あなたは生きてお国にお帰りなされ。父上も母上も、そして姉上も、あなたが死ぬのを喜ぶ道理はありますまい」

そして、不器用な笑みを浮かべた。

「さあ、参りましょう」

歩き出す半兵衛と源助を、咲はしばし無言で見つめていたが、やがて静かに、その後続いた。

* * * * *

道々、半兵衛は咲から、父与右衛門の為人、藩の窮状、そして今回の事件について話を聞く事が出来た。

藩内の度重なる水害、対策の水普請に費用が足りず、やむなく江戸の大店から金を借りる事となった。勿論公儀には秘密である。その手引をしたのが、大店と昵懇であった境川藩家老只見玄蕃であったと云う。

借金の手引をした見返りに、只見は八日市藩内の物産や労役に関し、色々と口を差し挟む様になった、

八日市藩の勘定方であった成田与右衛門は、当初から公儀に内密の借金には批判的であった。只見の横暴が始まってからは、家族共々江戸に住み、その横暴を封じる為に奔走した。

「只見が私達姉妹に眼を付けましたのは、その頃でございます」

咲は小さな声で言った。半兵衛は咲に歩調を合わせながら訊いた。

「藩主様は、その事をご存知で」

「はい」

当然か。知っているも手出しが出来ぬ、という状態なのであろう。

「聡明な殿でありましたけれども、境川藩藩主と家老の度重なる圧力で、最近は気が弱くなられて...」

咲は溜息をついた。

半兵衛は咲を見ながら、その利発さに驚いていた。まだ十六七という年頃だろうが、藩の事情に精通し、その敵の狙いすらも見抜いている。

成田という男、なかなか出来る男であつたらしい。

「いずれ藩の権益は、実質的に境川藩に乗っ取られると」

「表沙汰にはならないでしょうが、恐らく」

「ふむう」

この娘なら、この後自分を待っている騒動についても、見通せぬ筈が無い。

「ところで、日本橋を出てから直ぐに、尾けられているのはご存知でしょうな」

「ええ」

「品川の宿に着く手前で、襲われるやも知れませんぞ」

「あの、長内様」

咲は半兵衛の袖を軽く引っ張った。

「もう結構でございます。これ以上ご迷惑は掛けられませぬ」

「迷惑などではありません」

「えッ」

「咲殿、私を恨んでおいでか」

半兵衛の横顔を、咲は驚いて見つめた。

「そ、そんなことは」

「本当ですか」

「...」

「いいのですよ。御役目とはいえ、あなたの父上に手を下したのは私です」

「私...私、判りませぬ」

「人は恨みを持つ。当然なのです」

咲は、半兵衛の横顔に何やら怖ろしげなものを感じて、少し離れた。

「そこから眼を逸らさずとも良いのです。人とはそうした生き物です」

「...」

「しかし、あなたの母上は、その恨みを乗り越えて、策を講じられた。昨日からずっと考えて、今、そう思い至ったのです」

「は」

「いや、これは私の買い被りかも知れませぬが...」

半兵衛は、照れ笑いのような表情を浮かべた。

珍しく口数の多い主人を、源助は奇妙な顔をして見遣っている。

「母上は、私が今こうして、咲殿のお伴をするような男だと、お見通しだったのではありますまいか」

咲は驚いて立ち止まった。

「ま、真逆」

「そうとは限りませぬが...。何となく私は、そんな気がするのです。だから母上はあの猫を連れて来た」

「ああ」

「私がみすみす、あの猫の持つ病で死んで仕舞おうなどと、母上は考えなかったでしょう。とすれば、狙いは一つしかありません」

半兵衛は咲に向き直った。

「あなたを守らせる事、それを私に託したのではありますまいか」

咲の頬を、ひと筋の涙が伝って、落ちた。

* * * * *

「ここが鈴ヶ森の刑場です」

夕陽が紅々と刑場を照らしていた。
形の崩れた晒し首に、蠅が集っている。
昨日執行された火焙りの刑の燃えかすが、未だ辺りに散らばったままである。

「ここで待ちましょう」

半兵衛は呑気な口調で言った。

「待つ？」

「ええ。もうすぐ現れます。おい源助」

「へい」

源助は半兵衛に走り寄り、金網で補強した魚籠を渡した。

「こ奴の供養も、此処でしてあげなければなりませんから」

「これは一体」

「...あの猫です。もう虫の息でしょう」

「ああ...クロや...」

咲は魚籠を、まるで猫の背を撫でるかのように、愛おしそうに擦った。

「可哀想に。私達に関わらなければ、こんな事には」

咲はぼろぼろと涙をこぼした。

「大丈夫です。猫は恨みなど持ちませんよ」

「えッ」

「恨みを持つのは、人です。猫はその恨みを映す鏡なのですよ」

半兵衛はぼん、ぼんと、肩に掛けた魚籠を叩いた。

「あなたの父上は、一点の恨み辛みも、辞世の句に遺さなかった。天晴れな方だ」

「...」

「それは、猫に学んだのかも知れませぬ。いや、あるいは....」

背後に、どやどやと人の気配が集まった。

振り向くと、二十人ばかりの浪人風情の男達。その背後には、駕籠から降りつつある派手な着物の男。

「あれが」

半兵衛は顎でその派手な男を指し、咲に訊いた。

「はい。境川藩家老只見玄蕃です」

「ふむ...」

男達は、咲と半兵衛を取り囲む。

只見玄蕃が、半兵衛に向かって言った。

「何者か知らぬが、何故その娘の伴をしておるのかな。我等はその娘に用があるのだ。こちらへ渡してもらおう」

「随分と念入りな事だな」

「娘は新陰流の使い手と聞く。見た処、その方も只者ではあるまい」

「ふん」

咲は仕込み杖を構えた。しかし半兵衛はそれを制し、

「事を構える積もりは無い。俺はほれ、この通り利き腕を失うておる」

と、空の右袖をぱんぱん、と叩いた。

咲は仰天して半兵衛を見つめている。

「ほほう、なかなか殊勝ではないか」

浪人達がじりじりと間合いを詰める。只見は安心した様子で、半兵衛と咲に近付いて来る。

「さあ、娘を渡して貰おう」

只見は不敵な笑みを浮かべた。その瞬間。

「貴様に渡すのは、これだ」

源助が横から魚籠を支え。

半兵衛は魚籠を開け放ち、底をぽん、と叩いた。

「じゃるうううううう」

怖ろしい鳴き声が魚籠の底から湧き上がったかと思うと、黒い影がそこから勢いよく飛び出した。

「じゃあああああッ」

「ひゃあああ」

只見の顔に、あの黒猫が齧り付いて滅茶苦茶に引っ掻いた。

鮮血が飛び散る。

「た、だ、助けてくれえええッ」

半兵衛は、左手で逆に指していた刀を鞘ごと抜いた。そして、

「むん」

下から只見の顎ごと、黒猫を叩き上げた。

「ぐわあ」

「ふぎゃッ」

只見はそのままひっくり返り、猫はどたりと地に這いながらも、ぶるぶる震えて、半兵衛を見る。

「じゃああああ」

黒猫は半兵衛に飛び掛かった。

「許せ」

半兵衛は、すう、と横に滑るように動き、黒猫の攻撃を避けた。その刹那。

目にも止まらぬ速さで、何時の間にか抜き身になっていた刀の切っ先が、猫の首筋を、するりと通過する。

猫の首は、胴から離れて、すとんと落ちた。

「ああクロヤ」

「触るでないぞ咲殿」

半兵衛はそう咲に釘を刺し、刀を左手に持ったまま、只見に向き直った。

「おや、お怪我をされたか」

浪人に両脇を支えられ、やっとの事で身体を起こした只見の顔は、鮮血が滴り紅い筋が交差して、怖ろしい形相になっている。

「ひ、ひいい、き、貴様ああ何をするかああ」

「俺は何もしておらぬ。あの猫は恨みを宿していたかも知れぬがな」

「何い」

「成田与右衛門がこの世にさっぱりと置いていった、恨みの塊をな」

「そそそそんなものが」

「あるさ。狂うた犬の病という、恨みだ」

「ヘッ」

「あの猫は、お前が飼っていた犬に咬まれ、発病した。そしてその猫が、今、お前を咬んだ」

「ひッ」

「病に冒されれば、誰も生きてはおられぬ」

「ひやああああああああああああ」

只見は取り乱した。

「松殿の恨みも、少しは入っているやも知れぬ」

「わああああああああああ」

「秘薬とやらが屋敷に有るのであろう、いや、それも作り話か」

半兵衛は表情を変えずに、駄目を押した。

「ききき貴様ァ！ 何をしているのか判っておろうな」

「ああ判っているさ。俺は病に冒された猫の入った魚籠を開けただけよ。お前が間抜けな面を見せた処に、猫が自分で飛びついて行ったのさ」

「何だとお」

「そして、ほれ、俺はお前の仇を討ってやったぞ。猫は首を斬られてもう死んでおる」

「そ、そんなものが、そんなものがあッ」

「他にどんな言い訳がご入り用かな」

半兵衛はずい、と只見に近寄る。ひい、と只見、そして只見を支える浪人は後ずさる。

「お判りか。此処は鈴ヶ森だ」

氷のような眼差しで、半兵衛は只見を射貫いた。

「罪人が、それ相応の仕置を受ける場所よ」

わなわなと震えていた只見が、わあと叫び、浪人達に命じた。

「きっ、斬り捨てい、この者達を斬り捨ていッ」

ざあっ、と浪人達が抜刀する。咲は再び杖を構えた。

しかし半兵衛は動じない。

「ほう。此処で抜いたか、お主ら」

浪人達は、半兵衛の迫力に押されて動けない。

「今ここで大人しく帰れば良し。さもなくば」

ざわざわと、浪人達の周りで音がした。ひいッと一人の浪人が小さく叫んだ。

周りは、山田浅右衛門の弟子達二十人余に、ぐるりと取り囲まれていた。

「首を付けたまま、此処から出られると思うな」

地獄の底から響くような、怖ろしい声が、半兵衛の口から洩れた。

「あの男、く、首斬り役人」

「長内半兵衛」

「首斬り半兵衛か」

「ということは、こ、こいつら、山田浅右衛門の首斬り一門だッ」

浪人達の口から、半兵衛の名が、山田浅右衛門の名が挙がる。
ずい、ずい、と半兵衛は只見に近づく。
虎之助以下の浅右衛門一門もまた、じりじりと輪の幅を縮める。
一人、また一人と、浪人達は逃げ出した。

「お、お前達、ままま待てえッ」

只見は顔を手で覆うたまま、這々の体で駕籠に乗り込み、去って行った。

* * * * *

刑場の脇、少しばかり高くなった土手の上に、半兵衛と咲は黒猫の墓を作った。
ぱんぱんと土饅頭を叩く半兵衛の背中に、咲が申し訳無さそうに声を掛けた。

「あのう、長内様」

「何です」

「本当に、長内様と一門の皆様は、大丈夫なのでしょうか」

「ご心配には及びません」

手の土を払いながら、半兵衛は立ち上がった。

「あの者達が我々を襲ったという事が露見すれば、その理由も問い質さなくてはなりません。それに私は、浪人とはいえ公儀の者
。藩士が矢鱈と手を出す事は出来ませぬ」

「しかし」

「宿から先は、奴らも手を出せません。関所の役人には申し伝えて置きました故。今晚、虎之助にはこの宿で御嬢様の警護をさせ
ましょう。念の為」

「は...」

「お一人での旅が続きます。ゆっくりお休みください」

「...」

「大丈夫です。先ず御身を大切になされよ。さあ」

半兵衛は、咲を猫の墓の前に誘った。
夕闇が濃くなり、潮風が辺りの木々をさらさらと揺らす。

墓に手を合わせ、暫し無言で佇んだ後、咲は言った。

「クロは、やはり恨みを晴らしてくれたのでございましょうか」

「いいえ」

半兵衛は短く、力強く言った。

「先程申しました通り、猫は恨みなど持ちません。ただ人の恨みを映すのですよ」

「はあ」

「この猫も、最期まで懸命に生きようとした。ただそれだけです。その姿に、私達が恨み辛みを投げ掛けるのです」

咲は、ほう、と溜息をついた。

「ならば、猫とは何と哀しい生き物なのでしょう」

「そうですね。しかし」

咲は振り向き、半兵衛を見つめた。半兵衛は続けた。

「彼等は哀しい時には泣くのです。私はそれが羨ましい。私は泣く事すら許されなくなった」

生業として人を斬る、その哀しさを、咲は半兵衛の伏せた眼の中に感じた。

「だから私は猫を飼うのかも知れませぬ。人の哀しさを、彼等は分け持ってくれる様な気が致しますので」

「長内様」

「そうして、猫は哀しくなって、夜の月に向かい、咽び泣くのです」

そう言って半兵衛は、空を見上げた。

東の空に、大きな月が、ゆっくりと昇ってきた。

完

初出：「ねこバナ。」2009年9月11・12日